



還暦のゴールデンウィーク

神戸大学 経済経営研究所
教授 伊藤 宗彦

このところ、経済経営研究所主催のシンポジウムが面白い。一つには、NHKの朝ドラの制作に、少なからず、研究所が絡んだ影響だと思われる。実は、朝ドラというのは、あまり見たことがなかったのだが、気がつくやうに、朝7時半からBSの放送を見てから家を出るのが習慣となっている。今回の「ひよっこ」もまた違った思いで楽しみにしている。時代背景が、自分の誕生とだぶるのである。昭和真っ只中の頃であり、まさに物語に入り込んでしまう。

ドラマの設定の昭和30年ごろ生まれた人たちは、還暦を迎えた。昨年を思い出すと、自分も還暦を間近にひかえ、何かを始めたい気持ちになっていた。中学校、高校、大学と、還暦の同窓会が続き、旧友との40年ぶりの再会がたくさんあった。これからは、時々、旧交を温めようということで、お誘いを受けるのがゴルフである。実は、今から20年前、ゴルフにのめり込んだ時期があった。カリフォルニアに住んでいたという環境が大きかったが、その後、日本に帰り、ぷつぷつと止めてしまった。今回、ゴルフを15年ぶりに再開したのは、こうした旧友からのお誘いに応えるためである。いざ始めようとするやうに、クラブがない。早速、購入した。そうすると不思議なもので、あちらこちらから誘いが入り、還暦を迎えたやうに、この2ヶ月で4回もプレーできた。

前置きが長くなったが、本題はここからである。実は、ゴールデンウィークの最後に、廣野ゴルフ倶楽部でプレーした。おそらく、ゴルフを知らない方はどうということはない話であろうが、「廣野を見て死ぬ」という格言があるほど、最もプレーできないコースの一つである。クラブの大富豪であろうが、メンバーの同伴がなければ回れない。そのメンバーは、たかだか200名程度と、きわめて少ない。さらに、廣野は一日、10組程度しかプレーできない。本当に限られた幸運なゴルファーになれた喜びはひとしおなのである。手前味噌な話で恐縮だが、少なからず、この廣野ゴルフ倶楽部には思い入れがある。父を亡くして15年ほど経つ。父もゴルフが唯一の趣味であり、この廣野を回ったことを何度も聞かされた。このゴールデンウィークの最後に廣野を見れて、父親が自慢していた気持ちが少し、分かったやうな気がした。

再び、朝ドラの話に戻ろう。昭和の映像は、単にノスタルジーな感情だけを呼び起こすのではないなとつくづく思う。自分の立ち位置、系譜、旧友とのつながり、すべてを結び付けるプラットフォーム、投げ所なのである。廣野ゴルフ倶楽部の開業は、昭和7年であ

る。その伝統は今でも引き継がれている。ゴルフは、基本的に4名で回ると思っていたが、3名で回る。運転手付きの車で行くのが普通らしい。事実、運転手の控室があった。ドレスコードは、厳格に守られている。およそ、今風のマーケティングの理論とはかけ離れた世界であり、ゲストをもてなすのではなく、メンバーのための決まりである。こうした決まりを作ったのは、地元、兵庫県芦屋市出身の白洲次郎と言われている。彼は軽井沢ゴルフクラブで会員のためのゴルフ場を作った。ここで、かの「プリンシプル」という概念が登場する。「会員のためのゴルフ場」である。総理大臣であろうと、メンバーの同伴がなければ、追い返したそうである。われわれの研究所は、実は、もっと古い。研究所の「プリンシプル」は何であろうか。還暦を迎えたといっても、まだまだ若造なのであろう。還暦後のゴールデンウィークの独り言である。